

間の損得とはかけ離れた自然の喜びを伝えるという極めて人にうらやましがられる生活も続けてきた。地震被災地のこの現状をみて、過酷な自然にも耐えられる力を持っている野外生物学者が立ち上がるべきだと思った。自然の中で生きる術を知っている我々が行動をすべきだと思ったのである。

=用語解説=

#### ■ RQ市民災害救援センター

RQ市民災害救援センターは東日本大震災の被災者救援のために、3月13日に発足した任意団体(RQはレスキューの略)。「NPO 法人日本エコツーリズムセンター」が中心となり、団体の活動に賛同した市民有志で結成された。

## 企業

# 災害復旧支援隊を受け入れ、 避難所の皆さんに無料日帰り温泉サービス

仙台市

佐々木 圭 株式会社ホテル佐助 社長室長・販売支配人

取材日 2011.5.13

ホテル佐助では環境配慮企業を目指し、全社員が一丸となって電気・ガス等のエネルギーの高効率化や使用量削減、周辺地域の清掃活動に取り組んでいる。また、お客様に提供する食事には旬の食材を選び、朝食に環境保全米「秋保米」を使う他、調理残さや食べ残しなどの食品廃棄物排出量の削減にも取り組んでいる。

## 3月11日 14時46分

地震の時刻はちょうど会議のお客様がいて、一般のお客様はチェックイン前という時間帯だった。お客様、そして従業員を外に避難させたが、余震もあり周りの状況がまったく見えていなかった。私共が一番被害が大きいのか、はたまた周りで大きな被害が起こっているのか、情報がまったくとれない状況が続いていた。ただ、これはただ事ではないということだけはわかった。その後に徐々に情報が入ってきた。津波の情報、ライフラインがすべてダメになっていること、交通機関の不通。お車で来ていた方の中にはその日のうちにお帰りになった方もいた。ほとんどの方は3日から4日程、長い方で5日滞在された。ロビーのガラスが割れ寒い状況ではあったが、余震が続き上階の客室へ入るのは怖いということで、震災初日はロビーで100人以上のお客様がお休みになった。食事は旅館料理のため、お鍋などは固形燃料で炊けるようになっている。固形燃料の在庫がある限り鍋でうどんを作ったり、お米を炊いた。カップラーメン等の備蓄もあったので、なんとか3食お食事をご用意することができた。

電気は26日くらいまで不通だった。自家発電が動いたので最小限の非常灯が点灯し、真っ暗にはならなかった。お客様がお帰りになった5日目には自家発電を止め、休館状態に入った。電気とガスが復旧すればいつでも営業再開できるよ



うにしようと皆で声をかけ、崩れたものを取り除き、後片付けをし、毎日掃除をした。ベニヤ板を貼っていたロビーには、昨日ようやくガラスが入った。

## 災害復旧支援隊の受け入れ

3月25日から仙台市ガス局の復旧隊を中心に災害復旧支援の方の受け入れをスタートした。まだまだ電気・ガス・水道がきていない、油の供給もない不完全な状態だったが、給水車で秋保に水を入れてくれる約束ができたことで受け入れを決めた。

支援隊のピークは4月の前半頃で、多い日で1日に800名程の方が宿泊した。皆さんは朝6時に出

かけて行き、夜の11時・12時まで帰ってこないような状況だった。仙台のため、宮城のために一生懸命がんばってください、本当に頭の下がる思いだった。今も工事関係者の方や、警察官の方々にご宿泊いただいている。

先日、石巻の復旧に入った隊長さんとお話しをする機会があった。自分たちがマイナスからゼロまで復旧する仕事をした、僕らは帰るけれども必ず石巻は復興していくので、3年・5年後に見にきたい、また来ますよと言って帰っていった。僕らもそれまでがんばらなければいけないし、また来ていただけると言っていただけのことの嬉しさは、本当に涙が出るほどだった。

## 市民に日帰り温泉を

3月末、水が来てから日帰り温泉を始めた。重油がないため館内のお湯や暖房を利用することはできず、水は出るけれどもお湯が出ない状態からのスタートだった。温泉浴槽が2つあるので、1つの浴槽の温泉を使ってかけ湯をし、体を洗ってからもう1つの浴槽に入ってもらおう形をとった。多い日には千名近くのお客様にお越しいただいた。

その他に、仙台市と秋保温泉のタイアップで、4月の頭から避難所の方々を無料でご招待した。観光バス「るーぶる仙台」のバスがまるきり余っていたため、避難所と秋保温泉の間になるるーぶるを走らせてもらった。1軒あたり30人ずつを受け入れ、3-4軒が協力したので1日に100人程の方にお風呂を利用していただけれたと思う。

## 災害対策

何かが起きた時、何百名というお客様を抱えた状態で被災する状況が想定できる。マニュアルを作り、18ℓタンクでの水のストック、カップラーメン等ある程度の食糧の備蓄をしていた。実際、まさか使うことになるとは思っていなかった。ビルの構造上、水を上に汲み上げてトイレに流しているため電気がこないと水があがらない。そのため、ご宿泊になるお客様のためにタンクの水をトイレ用に1部屋ずつ配った。大浴場の温泉の水をタンクに詰め替えて、トイレ用の水として利用もした。

社員の中には身内で残念な結果になったスタッフもいたが、本当に一生懸命お客様のために動いてくれた。総従業員数は職員、パート職員あわせて200名。3月11日は約100名のスタッフが出勤していた。お客様を受け入れていたわけではないのでガソリン不足はさほど影響しなかったが、社員の通勤には影響し泊まり込む社員も多かった。

## 振り返ってみて

事務所のホワイトボードにも「何日目」と書いていた記憶はあるが、こうして振り返るといつで1カ月であったのか、本当にあっという間だった。今は一部コーナーを休んでいるが、ようやく一般のお客様を迎える状況となり営業を再開している。大変だったのは、これからどうやっていくんだらうという先が見えないところ。また宿屋をやっていくという希望を持って、復興隊の皆様をお迎えしたり、一般のお客様をお迎えしたりしていたが、これから東北がどのように力を戻して行くのかというところが誰にもわからない。観光が一番影響を受けやすい産業であるので、希望をきちんと見せることもできない中で社員に作業をさせる心苦しさは今なお解消されていない。予測できない不安要素を払拭できない中、営業を再開しているところが苦しい。今回お客様に「がんばってください」と言われたことは非常に多かった。「お風呂に入ったのが何日ぶりです、本当にありがとうございました」と言われた時に、温泉をやっている僕らの社会的使命というものを感じた。本当に、心が折れそうになることはいっぱいあったが、佐勘は秋保で34代続いてきた温泉旅館だ。これまでそれぞれさまざまな困難はあったことと思う。ここでつまづくわけにはいかない、という強い意志を持ち、社員皆で力を合わせてがんばってきた。これは今後にも必ず生きると思って今やっている。本当に大変なことがあったけれども、それを力や勇気に変えて、秋保温泉街がまた活気を取り戻せるようこれから一步一步、歩みを進めていければ良いなと思っている。



撮影：2011.3.21 破損したロビーのガラス